日刊建設工業新聞　2015年8月20日

所論諸論

職人との人間関係がうまくいかない施工管理技術者の方々へ

降籏　達生
ハタコンサルタント代表取締役

建設業界に入って間もない施工管理技術者の卵たち。

私もかつては、工事現場のこわそうなベテラン職人たちと、一緒に仕事ができるだろうかという恐怖心を持っていました。父親のような年齢の職人が、若い自分の言うことを聞いてくれるだろうかと。たぶん若い施工管理技術者はみんなそうだと思う。でも経験を積めば積むほど、それは職人たちの外見や雰囲気で判断しているだけであって、面と向かって話すと怖くないとわかった。見た目と中身は違うのです。

べつに恐怖心をなくそうと意識したり、逆に意識して偉そうにふるまったわけではありません。外見の怖さやことばの荒さは、はじめてライオンを見たときのように、気にしないように思っても、気にならなくなるわけではありません。ただ必死に職人たちと仲良くなりたい。心を通わせながら工事を進めたい。その一心でやっていたら、いつの間にか、気負いがなくなっていたんです。職人にとっては「本当に自分の仕事のことを考えてくれる監督さん」はありがたい存在です。いずれそのようになろうと、一緒に缶コーヒーを飲んで話を聞いて、職人の希望に沿い、かつ品質を守れる段取りを考えていると、恐怖心みたいなものがどんどん軽くなっていったんですね。変に偉そうにしなくても、現場できちんと仕事の話ができ、決められた手順どおり工事が進むようになったのです。

これはあるベテラン施工管理技術者が指摘していたことですが、本当にできる職人に怖くない人はいないのだそうです。確かに、本当に仕事のできる職人は、いかにしていいものを作れるのかばかりを考えています。だから時に口調が厳しくなったり、こちらのいうことに答えてくれなくなる。また逆に、本当は怖くない人であっても、仕事中に決してへらへらすることはないのです。

「人から好かれる」ことは、職人にとってどうでもいいこと。重要なのは、お客様がどういう工事を希望しているか、施工管理技術者が本当に自分の仕事のことを考えてくれるかどうか、そして結果としてよいものを作ることなんです。

私が建設業界に入ってちょうど5年たったころ、どうしても関係がうまくいかず、怒られてばかりの職人がいました。いくら缶コーヒーを一緒に飲もうとしても飲んでくれない、一言も話してもくれない。口を開けると私に対する注意や文句ばかり。私は自信をすっかり失っていました。

そんなある日、しばらくその職人の顔を見ないなあと思っていたら、なんとその職人が亡くなったと聞いたのです。心臓に病気を持っていたらしく、急に発作が出たためだそうです。

お通夜に出かけると奥さんが思いもよらないことを言いました。

「あんたが降籏君やね。主人がいつもお酒を飲みながら、あんたのことを言っていたわよ。『あいつはものになる男だ。突き放しても、突き放しても食らいついてくる。その上、缶コーヒーを持ってきたりするというかわいいところもあるんだ。いい現場監督になるぞ』とね」

私は涙をこらえることができませんでした。そのような気持ちで私に接していてくれたのか。あの厳しい言葉や態度は私を育てようと思う愛情だったんだと。私はこんな心温かい職人と一緒に働いてきた幸せを感じ、一生この業界で生きていこうと決心した瞬間でした。

あの職人のおかげで今の自分があります。そして私自身もそれをみならって、愛情をもって、かつ厳しく人材育成を進めようと思います。